

# にわかヤモメの八十歳

加賀 乙彦

沓岐坂という坂は、東京ドームのほうから白山通りという広い道を横切つて、本郷通りという東大前の、これも広い道に達する坂道である。坂道のなかほどに私の住んでいるマンションが建っている。私は朝、九階の自宅を出て、十一階の仕事場に出勤していた。そして夕方まで小説を書いて、九階の家に帰り夕食を食べるのだった。

これは朝食を食べて会社に行き、昼間働いて、帰宅するサラリーマンを真似たのである。というより、昼飯を家で食べないことによつて女房に負担をかけないでおこうという思いやりの生活リズムであった。昼食は、外食する。私は運動のためなるべく遠くのそば屋やインド料理屋や韓国料理店に歩いていく。往復で七千歩から八千歩ぐらいが平均の距離だ。女房は豊島区管弦楽団のヴァイオリン奏者で、楽器の練習をしたり友人とどこかでうまい昼飯を食べに行ったりしている。

ところが二〇〇八年十一月十九日の深夜に女房が急死してしまった。

享年七十。私は七十九歳のヤモメの生活になった。

まずは食事が問題である。朝飯は簡単で、ジャガイモを電子レンジでチンして、チリメンジャコと黒酢とグレープシードオイルをかけるだけだから簡単だ。昼の外食は今まで通り。困ったのは夕食である。近所にレストランがいくつもあり、おいしい店もあるがひどいものもある。つぎつぎに食べ歩きしているうちに、ほとんど食べ尽くしてしまい、飽きてきた。

私は、信濃追分の山小屋に独りこもつて仕事をする日々が多くなった。二〇〇〇年の正月号から、「新潮」に連載を始めた『雲の都』という長編を書くためである。この小説は戦後の東京を舞台にしていて時代の様相を正確に写しながら物語を綴っていくので資料が沢山必要だ。で、車で東京から信州まで行かなくてはならない。

東京と信州では、空気がまるで違う。筆も軽やかに進む。東京で書けなかったシーンが信濃追分では、す

るすると出てくるのは不思議である。いきおい、私は東京に帰りたくなくなる。いっそ東京の家や仕事場を開めて、山に住もうかと、最近は考えている。

二〇〇九年の四月の誕生日で私は八十歳になった。傘寿の祝いを友人や教え子がしてくれた。予定では、もう長編は終わっているはずなのに、まだ肝腎の終決部に到達していない。そこで少し焦つて、山中に独居して小説を書いていると、息子や娘が心配して、忠告してくる。七十歳でも膜下出血で母親が頓死したのだから、八十歳の親父はなお危ない、山の中に一人でいてもらつては、いざというとき助けられない、やっぱり東京にいてくれたほうが安心だ、云々。

私の足は、二十年間アイススケートを趣味として、毎日一時間は滑っていたので、一応健康だが、心臓が弱い。循環器内科で精査してもらつたら、冠動脈が少し狭くなつていて、心房細動という診断だった。心房細動による不整脈をとめるために、薬を飲まねばならない。私が沢山薬を飲むのを知っている息子和娘は、ますます不安になるらしい。

山小屋では私は自炊する。もちろんレシビは少なく、カレー、焼きそば、お好み焼き、焼き魚などだ。と

きどき、車で佐久まで出て、レストランの食べ歩きをしてみたが、ほとんどがチェーン店で味が画一的である。といつて、高級料理を毎日食べるほどの余裕はない。女房の存在がありがたかったのだと知る毎夜となつた。こういうとき、私はあきらめが早い。要するにうまいものを食べるのをあきらめ、栄養さえとればいいと覚悟を決めるのだ。ありがたいことに、魚の種類は多いので焼き魚、煮魚で、変化をつけることができる。日本に生まれた幸いが魚であるとは私に気づいた。

息子や娘の心配はもつともだと思ふけれども、山の空気のおかげで仕事を休むのが、私には大きな喜びなので、それにいつ、死んでもかまわないと臍を決めているので、自分では頓死も恐くはない。

小説を書くのは大変でしょうと、よく同情されるが、私のばあ、書くことは喜びであり、唯一の趣味なので、大変だなどと思つたことはない。

まだまだ、私には小説で書きたい主題がいくつもある。今書き下ろしでベトク岐部カスイの伝記小説を書いているが、これにも時間をとられ、忙しい毎日なのだ。まあ、この歳で忙しいのは神の恵みと私は思っている。(作家)